

市内の神社 座談会

出席者

浅間神社総代	佐藤利雄	福田神社総代	柴田 政一
諏訪神社総代	浜田賢	神明社総代	張ヶ谷一郎
深見神社総代	富澤美晴	田中八幡宮総代	保田 重雄
熊野神社総代	高橋三郎	若宮八幡宮総代	関水 重雄
桜森稻荷総代	中村一良	市史編さん委員	日野 一郎
山神社総代	市川銀蔵	”	山下 武雄
左馬神社総代	鈴木馬之助	”	山口 正男
鯖神社総代	石井保之	” 司会	山崎 忠義



山崎 今日はお忙しいところをお集りいただきありがとうございます。当市では現在市史編さん中で、いろいろ歴史資料を収集しているのですが、神社については、殊に文書的な資料が残るといことはまれで、どうしても伝承によることになってしまいます。従ってこれは地元の方から直接お話を伺うのが一番よいと考えましてご足労いただきました。今日は各部落の神社総代をしていらっしゃるみな様に、氏子を代表して「うちの神社にはこういういい伝えがある」というようなことを卒直に話し合っただければと存じます。どうぞよろしく願います。では、古い由緒がある深見神社総代の富澤さんからいかがでしょう。

富澤 総国風土記は歴史家にはあまり信用されていませんが、総国風土記を正しいものという見解のもとに話しを進めていきたいと思います。深見神社の創設年代は厳密にいつかはっきりしないけれども総国風土記のなかに「雄略天皇二十二年三月祭るところ暗 神(くらおかみ)なり」と書かれている。1500年前の創設であろうと考えられる。その後地元の資料あるいは神社、古老等の意見によりますと、桓武天皇の御代に国使が春秋の例祭等に遣わされている。それから少し時代がさがりまして、醍醐天皇の御代の延喜年間に三代格式、延喜格式に基づいて律令格式ができる。律は憲法、令は施行令、式は施行細則のようなもの、式に基づきまして全国の神社を登録したものが延喜七年の神社神明帳であり、これに深見神社が登録されている。いまからさかのぼって1060年位前その時に登録された神社は全部官社で、国弊社で...官社として祀(まつ)られている。なお、その年代の少し前に深見郷は1270~1280年前、米・粟・稗・蓮・菱の実、その他鰻・鯉・鮒あるいは薬草、そういうものを出して、官

吏の往返の饗に充てると総国風土記にでていますが、これから先は私の推測ですが深見神社で官吏の饗応をするのではなく、その当時は国分に国府があったであろうから、国府に出して官吏の饗応に充てたのではなかろうかと考えられる。それから総国風土記にでていますが、田道翁という人があります。この人は90歳位まで生きたと書いてある。天智朝の頃西暦665年頃、田道翁という人がありまして、木草・海苔を常食す、穀類を食はず家田を分ち貧しい人にあたえる。一生婦女子をめとらず90有余歳まで生きた。この人が亡くなった時には異香が郷に満つ、その姿は青瑠璃の如し、そこで里の人たちが、それを尊敬し崇めまして小社を建て祀る。それは深見神社の北側にあったと総国風土記に書いてある。これも深見神社と密接な関係があるように思われます。その後になりまして、鎌倉時代に入りますと鎌倉幕府との関係がでてきますが、北条政子の懐妊の時に安産祈願を行って、これは吾妻鏡にでています。大きい神社あるいは式内社、これらの神社はあげて北条政子の安産祈願をしている。時代が少しくだりまして、後北条の少し前、長尾景晴の乱、山田伊賀守藤原経光が深見城の城主であった。それが太田道灌に攻められ、その時に探見神社で戦勝祈願をしたというふうに伝えられている。それから少しくだりまして、徳川時代になりますと旗本の知行地になるわけですが、深見の場合は坂本小左衛門重安、坂本家の本家・分家の知行地になり、この本家・分家とも神社に対して非常に信仰が深かった。社地・山林・畑を寄贈したり、あるいは神社の改築にお金を出したり、そういうことが記録に残されている。それから冒頭で申しあげましたが深見神社の集神は「暗神(くらおかみ)」で現在祀られている祭神は武甕槌命(たけみかづちのみこと)です。それがいつ頃暗神から武甕槌命になったかと申しますと、だいたい徳川時代中期ちょっと前、坂本小左衛門重安は常陸の鹿島神宮を大変崇拜していて、そういう関係で常陸の鹿島神宮から分霊を受けて深見神社の祭神にした。これは徳川時代になってからで、それで従来から祀られていた暗神は神社の境内にありません。御倉稻荷に合祀してある。以来、深見神社の祭神は武甕槌命というふうになっている。なお、明治9年に隣地の仏導寺の火災で類焼して大変立派な神社であったのですが、東向きで...現在は南向きになっている。現在の入口の所に神楽殿があった。それが類焼によって全焼し、神社にありました宝物・資料等はほとんど焼いてしまった。この時に深見の地区内に深見神社の他に諏訪神社というのがあり、坊之窪と島津の間、いまは大和東小学杖のすぐ上、ここに諏訪神社があり、この神社を深見神社に合祀した。従いまして、現在は武甕槌命・建御名方神(たけみなかたのかみ)このお二方が祭神として祀られている。それから昭和16年になりまして、山崎さんが中心になりまして神社の再建をしたわけですが、それまで焼失してから約65年位の間仮宮でありましたが、ようやく地元の協力によりまして現在の御社殿が完成しました。これが昭和16年であります。その頃は郷社として社格をいただいていたのですが、その郷社もいつとはなしに郷社でなくなり指定村社という形で過ごしており、神社再建と同時にまた申請をして郷社となっ

た。それから昭和 20 年、終戦やマッカーサー指令によりそういう社格等はなくなりまして、現在は神社庁に属しております。おかげさまで大変皆様方の信仰が厚く、年とともに隆盛をきわめています。きわめて簡単ですが。

山崎 それでは柴田さん、あなたの方の福田神社、これもなかなか苦労しているが
…。

柴田 いま、みなさんのお話を聞いていながらメモしてみたのですが、福田神社はいま桜ヶ丘の駅の西側、住宅の真中にあり、これは昭和 41 年に移しました。それ以前は境橋の日枝神社と山下の子之神社で、合併したわけです。従って子之神社の氏子で山下武雄さんがおられますので、私は合祀するまでの日枝神社の縁起について申しあげます。日枝神社というのは我々の先祖が慶長の初め頃、関ヶ原の戦の前に美濃の方から戦難をきらって平和な村づくりをしようとして一族を連れこちらに越してきた時に、滋賀の日枝神社の御霊をいただいてきたということがおこりで、慶長元年か 2 年の頃のことでございます。祭主は私たちの先祖であった柴田新五左衛門でございます。この子供の沢右衛門・壱之助・平四郎・源五左衛門・半兵衛、4 人の男の子をひき連れてこちらへきた。いま現在山王藪といっています福田 4880 番地のところ、いまは工場が建っていますが、そこに昔から山王藪という土地が残っています。そこに一たんお祀りをしたそうです。それから、その北西の方に部落づくりをしまして、5 軒・6 軒と家ができて、その後、藤原正勝という人がきて、それに私のところの娘が一緒になって柴田正勝となって、戦乱の時代が治まってから正保元年頃と書いてありましたが、伏見のお稻荷さんを、またいただいてきまして境内に祀ったわけです。

山崎 これは柴田一族が主として、いわゆる神様をかついできたというわけで、柴田一族の氏神ですね。

柴田 そういことです。昭和 41 年まで氏子が全部柴田一族でいたわけです。その後、嘉永 6 年 2 月神社の改築をやったのですが、その前に寛文元年頃お宮を福田 4802 番地、いまの日本飛行機のあるところで、あそこへ持っていき立派なお宮を造ったそうです。それまではあまり立派ではなかったようです。何十年かそれでやっていたらしい。部落一族が発展してきたんで、その身近なところへ引越してきたということでございます。それから嘉永 6 年に改築をしまして、それは記録はないのですが神社の中宮の柱に書いてありましたので、それは間違いはないと思いますが、それから明治 6 年になって一たん山下の子之神社と合併がまとまって、これは県知事の認可をいただいており柴田国満さんのところに書類があります。

山崎 明治6年ですか。

柴田 明治6年に両方が合併して真中あたるところに山王様があった4880番地、この山王山へもっていったのです。そこに2年間あったのですが日枝神社側は全部が同じ一族ですし、宗教も全部日蓮宗で日蓮宗はお宮さんで南無妙法蓮華経を盛んにやるわけです。そういう宗教の違いが一番いけなかったようで明治8年に分かれます。分かれる時も県知事から認可をいただいている。その書類は柴田国満さんのところに残っている。そういうことで明治8年にもとあったところ、福田4802番地へ移しました。それからずっとそれでやってまして、氏子もだんだんと増えて16軒になり、みな柴田でございます。それから昭和36~37年頃、飛行機があまりにうるさいので氏子が全部移転してお宮だけ残してあったのですが、それではしょうがない、もったいないというので国の補助もいただいて現地福田5148番地、いまの福田神社のあるところへ白羽の矢を立てて神社庁の許可をいただいた。それで、その時にちょうどあその土地が山下の子之神社の総代さんの山下秀夫さんの土地であったので、山下秀夫さんをお願いしている間に子之神社と一緒に合併しようじゃないかという話しができて、年寄の中には一度合併してけんか別れしたんだから、また同じことを繰り返すということで、やめた方がいいのじゃないかという意見もありましたが、多勢の力でどうやらそれも無事に賛成をしてもらいました。これは子之神社と一緒にしようということで社殿は全部日枝神社の社殿、それから中宮に子之神社の中宮と両方を合併して、石段は両方合せていまのところ積んだのですが、石段の段数がだいぶ増え両方の石段を合せてもまだたりませんので、新しくコンクリートで造り、鳥居は子之神社の鳥居を持ってきて、それから境内の樹木は主として日枝神社のを持ってきました。日枝神社は祀られた当時から明治の初め頃までは山王権現という山王様でしたが、その後中根さんの所領の頃に日枝大神と改められ、のちに日枝神社、のちに村社という格で、また子之神社も村社で、しかも御神輿も一緒にやりましたので合併に今度は困難はなかったし、またその後15年経過しまして、いま現在氏子の数は2620戸になり、当時合併する前は両方の氏子合せて100軒くらいだった。非常にまわりの発展とともに神社の氏子の数も膨大に増えまして盛大にやっています。ただ土地区画整理事業を進めているので、まだ神社の土地が換地されていけませんので子之神社との合併が、神社庁の方へ土地謄本を出すことができませんので、一応いまの神社のところは日枝神社という形で許可をいただいておりますが、日枝神社・子之神社ということではなしに一応全部で造った福田神社ということをやっています。

山崎 それでね、あなたの神社の御霊社は福田神社ですね。御祭神は2つですか。

柴田 御祭神は山王権現・大山祇神(おおやまつみのかみ)・須佐之男命(すさのおのみこと)、それから子之神社は大黒様ですから大己貴命(おこなむちのみこと)でございます。それから境内社として第六天とお稲荷さん、伏見稲荷を祀ってあるものです。やはり340~350年たっています。山王様は柴田の氏神で、子之神社は山下の氏神ですが、もうみんな部落も入りこんで、いまではぜんぜん境はないのです。両方の総代がそのまま残りまして、亡くなって変わった人もいますが、日枝神社側が3名、子之神社側が5名の総代が残ってまして、その8名で経営しています。自治会が15あります。

山崎 では、ひとつとんで公所の佐藤さんに浅間神社につきまして。

佐藤 御祭神は木花開耶姫命(このはなさくやひめのみこと)、それで創立年代ははっきりしていませんが文亀神名録の写しがあるのでございますが、これを見ますと81社の中に入っている。谷口に長島神社がありまして、その祝書を見たのですが、その創立年代は公所の浅間神社を源頼朝が創立した時と同時に造ったと書いてある。頼朝が造ったという根拠があるわけではないが、頼朝が創立したのではないかという説が伝えられている。ご存じのようにいまは下鶴間三九一番地にありますが、もとはいまの16号線の縁のつきみ野八丁目の所にあったわけでございます。上・下鶴間の中心で公所と中和田との境、高座郡で一番高い所に建っていたわけです。それで宝暦年間に谷口・中和田と下鶴間との間で神事・祭礼のことでいろいろと騒動があって、谷口・中和田が分かれていったあとは下鶴間村で管理するようになっていった。文明年間1470~1480年と貞享元(1684)年の棟札があったようです。現在、宝永4年のものがあります。宝永4年には富士山が大噴火し、当時ちょうど富士講というものを長谷川角行という人が江戸を中心に非常に広めていたので、その火山灰を集めまして富士塚を造って富士参りをするかわりに富士塚にお参りをしたようです。文久2年の村方絵図を見ますと字富士山道と、図面に参道があり、私たちは子どもの頃富士山道ではなく浅間街道と呼び畑へ行くにも浅間街道へ行くといていた。その当時富士塚を造ったわけですが、それが昭和49年に発掘調査をしまして、その時は富士塚ということは知らなくて、調査の結果富士塚であることが証明されました。それでいろいろと災害があったようで、やはり神社を崇敬する時代としない時代があったようです。一時は社殿も荒れていたが、大正13年に公所と鶴間の氏子が相寄りまして立派な社殿を造り、お祝をしたようです。それから昭和19年に指定村社になりまして、そして、その時に他に子之神社と住吉神社がございましたが、これを合祀したわけです。昭和28年に神道指令によりまして、宗教法人浅間神社となり、そして昭和48年に大和バイパスができるさいに、境内地が非常に細長く削られましたので大変だということで、

いまの現在地に移転し建築したわけです。そして現在は元の氏子 103 名で管理をしています。

山崎 それで僕は昭和 19 年の合併のお祭りにいって、いろいろと智恵を貸したのですが、いまいって見ると住吉社と子之社は、住吉社は、どこにあるかわからない。

佐藤 住吉社はちょうどバイパスにかかってしまいました。

山崎 あれはまったくなくなっているのですか。

佐藤 ご神像は浅間神社の中に合祀してあります。

山崎 それでは浜田さん。

浜田 諏訪神社も明治になる前、再度の火災によりまして資料がほとんど焼失したことで現在創建の年代はわかっていません。資料としましては、「新編相模国風土記稿」に諏訪社と当時も書かれております。その当時の記録によりますと、延宝 8 年の再建の棟札があり、従いまして、当時すでに、諏訪神社として現存してあったということで、なお、式内社岩楯尾(いわたてお)神社といういい伝えがあります。これは現在寒川の石楯尾神社の縁起の中でも見ました。縁起の中にも下鶴間村・大島村・名倉村に当時から神社があったと…。それがいつの間にか…正しいかどうかわかりませんが諏訪神社の名称が変わったのではないかと、古老に聞きますと徳川初期に変わったのじゃないかと、はっきりしておりませんがこのような状況です。記録をさらに詳しく調べますと、元禄 6 年 6 月に江原代官伊沢、都筑代官瀬沼が本地を寄進して御神体として本殿に納めた。さらに安永 7 年 7 月に社殿を再建し、さらに安政年間に再建にあたり、安政 5 年 11 月 6 日に社殿再建中に棟上げまでできたのを大工さんの失火により焼失した。さらに明治 2 年 6 月再建にあたり、明治 5 年 7 月に落成した。従いまして、現在の社殿・拝殿は当時のものです。当時は鶴間山観音寺が別当として管理されたということははっきりしている。観音寺も当時焼けたために諏訪神社としての書類が焼失してない。その後再建しまして以後たびたび修復し、さらに昭和 18 年に伊勢社・日枝社を合祀、その後ご大典記念に現在の社殿の家根替えをし、そしてさらに最近になりまして社務所を昭和 52 年に建築して現在に至っています。昭和 15 年 6 月村社に格付し、その後終戦になり現在は神社庁に登録指定となっている。建物の内容ですが現在の神楽殿は鶴間の学校の元の校舎を移築したものです。鶴間は非常に派手な所で学校になる前は歌舞伎が盛んで、東京から一流の歌舞伎役者を連れてきまして、現在の神楽殿は回り舞台になってまして歌舞伎の舞台として使い、その後

歌舞伎をやめて鶴間学校として使っていました。さらに古道(ふるみち)に学校が移りましたので、その学校を現在の神楽殿として移築したものです。現在の敷地は 15900 平方メートル、さらに末社として合祀しました伊勢社・日枝社を併せますと 1064 平方メートルで敷地は非常に広い。現在の氏子も多く崇敬者も多い。鶴間は神社が中心であり、すべての行事を神社中心にやっている。なお、大正・明治時代は大山街道の宿営地で諏訪神社も戦時中は軍隊の演習の宿営地として使われ、宮様もおいでになった。大正 12 年の地震の前までは 4 月の花見頃に競馬・競輪が行われ、その跡も現存している。9 月には相撲が行われ、本殿裏の傾斜地が自然のスタンドになっている相撲場があり、9 月 6 日が例祭日に当るので例祭日を日標にしまして夏から練習して、青年が祭日に相撲をとり力を競った。資料も残っていないので由緒・縁起については以上です。

山崎 浜田さん、あなたの方にも、公所にも非常に立派なご神像があるがあれはなんですか、あれはいつ頃つくったものですか。

浜田 それがはっきりしていないのですが。

山崎 いい伝えで、いつ頃だれが寄附したとか。

浜田 浅間神社については当時鶴間と一緒に祭神でしたので、鶴間と公所でいろいろありまして観音寺にかついできたとかいわれているが。

山崎 要するにあれは徳川時代の終わりですか。

浜田 ご神体は徳川時代の中期頃ではないですか。中宮・本殿・拝殿が安政年間に燃えたのですが、本殿の中にある中宮はそれ以前のもので、普請をするため他の所に仮に安置しておいた。ご神体は中宮と同じ年代のものではないかといわれています。

山崎 奉納年代は不詳であると...これは立派ですね。福田の方でも田中八幡と若宮八幡とが、やはりご神体ありますね。

浜田 付け加えますが、現在の全農センターにお宮がありまして、あれが元宮だといわれています。全農センターができる時にお宮を移築し、そこに碑が建っていますが、向こうが石楯尾神社であるのか、宮田塚から上にあがった時が諏訪神社になった時なのか、どうもそのへんがはっきりしません。諏訪神社の関係で先日、信州の諏訪社

にいった時にお聞きしたのですが、諏訪社が関東に分霊されたのは、鎌倉幕府へ諏訪家が仕えた時に分霊したということですが、私の方はまだはっきりしていません。

山崎 ここが大事なのだが、福田に2体、鶴間と公所に2体ずつ、これは不思議に同じようなのだが、当時50～70軒の百姓がとてもあのような物を作ることはできませんね。

柴田 神像というのはどんな形ですか。

浜田 ご神体は当時の公家の姿で冠をかぶったものであり束帯された。

柴田 日枝神社にもあります。神仏混淆で禁じられてお寺へ納めて、お寺に日枝神社ご神像としてある。衣冠束帯でご神体の須佐之男命・大山祇命の姿とは考えられない。ご神像があったお寺に納めて保管してあります。

山崎 それでは上草柳の高橋さん、上草柳もずいぶん苦労して時間もかかりようやく立派なもののできたのですが、草柳も歴史的事実が多い。

高橋 上草柳の熊野神社と桜森稲荷とは非常に密接な関係がありますので、できたら一緒に発言したいと思います。覚書がございませんので神社本庁へ昭和27年頃申請の時の書類により由緒を読みながら進めて行きたいと思います。それによりますと、昔、草柳を沢柳村と呼んでいたそうです。慶長の時まで深見村に属しておりましたので、正保年間に深見と離れて草柳村となった。現在の草柳村の熊野神社は草柳村の総鎮守として祭神は須佐之男命ということで過ごしてまいりましたが、元禄7年5月に当地の地頭戸田五介が再建されたようです。

山崎 元禄7年に再建したのですね。はじめてこちらに創建したのは。

高橋 創建年代は不詳です。それで弘化2年には名主彦右衛門がまた改めて再建したことになっています。

山崎 熊野権現が流れついたから、それを祀ったとか...そんなことはいいませんか。

高橋 私もそんなことは聞いていませんし、書類にも残っていません。

山崎 現在上草柳は桜森稲荷と別れましたね、そうすると桜森稲荷の氏子になっている人は熊野神社の氏子になっているのですか。

高橋 両方同じ氏子です。かつてはおそらく熊野神社の厄除けとしての末社であったらしいですが…。

山崎 もっとも、いまの神社制度はいいかげんにやっているものですから無理ないことで…。熊野神社というのは熊野の熊野権現から船でもって東へ東へきて落ち着いた。南北朝の頃、後醍醐天皇の末期ではなかったのか…。

市川 私どもで調べたので定かではないが、当時深見村から分かれ沢柳村といわれ、深見の領主と同じ領主で、鹿島神社と同じ祭りをやっていたわけです。それが戸田五介が地頭になられて草柳村が領地になり、その時熊野神社になり戸田というのが元来紀州の出で、それで領主になったので紀州の熊野権現を分けて祀ったような説がありますが…。これはあまり根拠がはっきりしていない。私の方はそういうわけです。

山崎 はっきりしないのが本当だろうな…。上草柳は七苗というくらいで、7軒か8軒しかなかったのですから独立してお祭りなどできなかつた。していなかつたかも知れない。それでは市川さん山神社について…。

市川 あれは非常に歴史は浅いです。私の方の神社の起原を調べると、やはり熊野神社から始まるらしい。私どもの住民のお祭りは深見の鹿島神宮をやっていた。それで旗本戸田五介が地頭になられた時に、その当時は沢柳村が草柳村と呼ばれるようになった。その時に熊野神社ができて、それから30年くらいたってから、さらに下草柳と上草柳に分かれて、下草柳がさらに中村・六軒村・大下(おおしも)の3部落に分かれた。

山崎 分かれたというよりも分かれざるを得ないような地形だよな。

市川 要するに私の方の村は合給で、俗に大下という部落の領主は本領が二俣川ですが、あそこに150石いただいて10何石が足りないのですから下草柳村の大下で補い、六軒の方は六軒でまた違う領主であると…。

山崎 六軒村はわずかの人数ですが、旗本が3人くらいいるのではないかと。

市川 細分化して、100石取りの旗本でもその土地が90石しかないから10石を草柳村からということで、小さく切られて適当に分配された。

山崎 われわれの若い時分には、六軒村は小さい祠のお宮だった。

市川 なにしる家の数が10何軒しかなかった。

山崎 だからあれだけの数では大変だ。

市川 調べてみますと、最初は深見の山王社を3つの部落に祀った。それを明治になってから寄宮して、その時に初めて3部落一緒になり山神社と名前がついた。私の方は調べてみますと鹿島神宮、現在の深見神社から始まって上草柳の熊野神社と…。

山崎 当時は深見神社といわないんだ、鹿島神社だった。鹿島大明神といったんだ、あの近所は鹿島大明神についていたんだね。

富澤 下草柳の神社の関係について、私の方の山王塚というところに山王様という社があり、そこには塚もあり藤沢往還の縁で、そこに松の大木がありまして、何年頃か私にはわかりませんが、その山王様を下草柳のたぶん中村だと思うが、中村という地域はずっと深見の地域ですから、その鎮守様として持っていった。これは書類も残っています。山王様はそこにあった大きな松を伐採して臼を作って各戸に、30戸くらいあったでしょうけれどもそれを全部に配ったという。その臼がまだ現存しているところがある。松の木で…。

山崎 それは珍しいですね。松の木の臼か…。

富澤 現在まで、まだ臼が残っている家もありますので、そういう関係で下草柳のたぶん中村に山王様がいったのだらうと思われます。それが山神社かどうかそれはわかりませんが、そういう記録はあります。

山崎 こんどは福田の方にいきましょう。福田の若宮八幡にご神像がある。田中八幡にもご神像がある。そのご神像がいつ頃できたか、どういうわけでできたか、あのご神像には何かわけがあるのでは…。どうです、保田さん。

保田 そうですね、そういうことは、私は福田ですがはっきりしないけれども、この間、市から出されましたパンフレットにご神像が写っていました。拝んだことはないのです

が市の文化財に指定されています。それによると「胡（やなぐい）」を背魚い、弓を持ち馬に乗る寄木造り、玉眼・彩色・体内に銘札があり、嘉永3年庚戌の作で、この程度しかしるされていない。めったに拝んだことがないが、いつああして写真にのられたのか。私の方はやはり代官が鬼門除として応神天皇を八幡山という所にお祀りした。地図にはのっていないけれど地元の人だけが知っている八幡山という地名があります。そこから現在の地に遷座して290年になるわけで、代官筑後守が、そこへ祀ったのが天正の頃だというふうにしるされております。

山崎 そこでだね、僕が不思議に思うのは、とにかく当時の福田は、いまは代官庭など繁栄しているけれども小さな部落ですよ。

保田 あの当時、明治末期で89世帯、それでやはり、その時維持管理費を米で集めていた。記録を見ると、最高が4升4合で、最低が四合で割り当てたわけですね。

山崎 そんな時代にあんな立派なご神像を造ったのは、保田代官が出したのかしら。

保田 さあ、それが定かでないの。

山崎 あれが不思議なんですね、それから若宮八幡、あなたの方だって、昔ちょっとした百姓大尽があったけれども、とにかく1人や2人でそんなに奉納するなんて普通できないよ。

関水 終戦直後の神社庁へ許可を願った時の書類があってそんな事がちょっと書いてあるので読んでみます。「神社明細帳の写、神奈川県高座郡渋谷町福田 209番地、若宮八幡社として、祭神は仁徳天皇、由緒、創立年代元禄11年再建とあれども祭神は木造、ご神体は延享3年2月吉日、今を去る203年とあるところから察するに、初めは少なくとも300年、あるいは400年前にさかのぼることと考えられる」そういうようなことが書いてあります。ご神像に関してこれだけです。

山崎 だれがこれを奉獻したのか。

山下 あれは特に...その地域に有力者が出てくれば別ですが、氏子というのが多いのです。誰がやったかは...

関水 文化9年8月に、ご神像の修理として仏師の吉見兵部という人が修理したようです。若宮神社の創建年代は不詳なのですが、元禄11年にお宮を再建した棟札があった。

山崎 再建だから50年も70年も前にやったのかもしれない。だから引地川筋はとにかく変わってるよ、よほど信仰心が強いのか、金持が多いのか、だから福田には財産家が多かったでしょう。

保田 田中八幡についての鳥居なんですが...

山崎 鳥居。

保田 あの神仏混淆であったという表れだと思うのですが、しまわしに欄干のような棒がついて鳥居が立っている。あれは神仏混淆の表れでしょうか...

山崎 明治以前は神仏混淆で、あれは明治政府になって神仏分離令を出しその前は混淆なんだ。だからみんな神社のお祀りは南無妙法蓮華經とか南無阿弥陀仏でやっていたのが神仏分離前なのだ。

張ヶ谷 明治元年には分かれたのですね。

保田 それで境内のわきに、通称坊主八幡という祠が別に祀ってある。

山崎 そうすると、これで福田までいったのか。

張ヶ谷 うちの方が残っていますよ。中福田というのは下福田・上福田という字名があったらしいですが、うちの方は先ほど話がありました下草柳・上草柳と違い、たった6人の姓しかなかった。福田開拓九人衆の中の斉藤民部と市川・張ヶ谷・山口・吉川、それに安藤があったのだが、その後子孫がどこへ行ったのかぜんぜんわからない。たった6軒だったので部落名もなくて、ただ神明谷戸とっていたらしい。それが結局下福田についているでもなく、上福田についているのでもなく、なんだかちゅうぶらりんの神明谷戸という1つの集落みたいになっていたのだが、だんだんと分家が増えてきて、それが神明神社を建てた。1.神明神社の所在地、大和市福田字甲四区528番地。2.神社境内地、308坪8合3勺立木共。3.当社の位置は中福田自治会の西部厚木基地の南側に位し、引地川の真上、綾瀬下和田線の市道八米の上の台地に鎮座する。4.神明神社の起源、由緒等については特に記録其の他の資料の依るべ

きものなきも当福田部落(福田村と称したり)起源と共に奉安せられたるものに非ざるなきか而して福田村の起源は大永年間、即ち福田開拓9人衆に係る(相模風土記、その他古老よりの言伝え等による)を以て、今を距る少くも400年以上を経過したるものと推定せらるるも恐らくその当時は創立の際且つ人烟稀少にして民間文化の程度低かりし(略)

日野 大和市史の編集をお手伝いさせていただいております日野でございます。先ほどから山崎忠義先生が、皆さま方のお調べになっているお話しをお尋ねして、貴重な資料を発表していただき、大変に私どもに参考になっております。実は発掘調査を県下で4か所やっています、これから順番に回らなければなりませんので、申しわけございませんが途中で失礼させていただきたいと思います。ここは先ほど富澤さんから発表されました延喜式内社の深見神社がある。これは平安時代の前半から相当有力な者がいて、中央朝廷に登録を進めたものだと思います。相当の集落があってその有力者が、ここにこういってお宮があるのだということを言ったので…。古いお宮があっても相当に政治的・経済的に有力でなければ中央の台帳に収録されるということはありませんので、そういう意味では深見は相当に古い集落であったと思います。まあ、そういったことから何かよい手係りがあれば大変に有難いと思います。いま承っておりますと江戸時代の浅間信仰…、昨日でしたか富士信仰・浅間信仰のテレビ放映がありまして、江戸時代ことに中部地方から関東地方にかけて、ことに関東では盛んで、浅間信仰の様子を映しておりましたが、ここにも熱心な浅間様のお祀りがあって、いまは形が小さくなりましたがお宮さんとして残っている。こういう1つの江戸時代における一大信仰のしるしが残っています。それから石楯尾神社というのは論社といいまして、ここじゃないか、あそこじゃないかということで県下では何ヶ所もありますが、ここでもお諏訪様の所が石楯尾神社でなかったか、あるいは元宮の所がそうじゃなかったのかというようなことで研究上いろいろと論議されているところですが…、ご神体か、あるいはそのお宮の元にいわれがあったのか、どういったことからきたのか大変民俗的にもおもしろい深味のあるお宮もありますし、学校の校舎が神楽殿になったという、回り舞台の奈落のある部分でも残っていれば建築史の上では大変な発見でありますので、その部分でもあれば県の建築史の関係の人に見せたら大収穫になるのではないかと思います。なお、ご神像は昭和49年につぎつぎとお参りをさせていただきました。今日実は福田の日枝神社にご神像があってお寺さんに預けてあることを私はうっかりしておりましたが、また教えていただいて拝まさせていただきます。また坊主八幡というのは僧形八幡をいうのでしょうか、ちょっとおもしろい名前が残っていますが、八幡様が神仏混淆の時に坊さんの形でこの世に現れていらっしゃる。奈良でも僧形八幡がありますが、そういった名称が平安の後半からでてきて、田中八幡に坊主八幡と、ただ坊さんをお祀りしてあるから坊主八幡といったか、八幡様のご神像が僧形

になっているからそういったか、坊さんがお祀りしたからか、そういったことをいろいろ調べて行くと新しい資料が発見されて、市史の編さんのうえには大変に深味のあるバラエティーにとんだ内容が盛り込まれると思います。最後まで承らなければなりません、あとで録音を聞き記録を読ませていただきたいと思います。途中で中座して申しわけございません。どうもありがとうございました。

浜田 山崎さん、私から先生方みなさんに質問がいろいろあるので伺いたいのですが、先ほど石楯尾神社について私が申しあげただけけれども、石楯尾神社というのがどんなものであるかというところ、祭神は神武天皇、日本武尊が楯を持ってこられてそれを安置して、それが高座(多加津久良)大明神となり、それから石楯尾神社になったのだと...

山崎 石楯尾というのは、これは人によって違ったことをいう人もあるが、一般的には自然の岩がたっていて楯になって、それから向こうが川とか、ちょうどいまのお城の石垣のようになって、向こうが平地になっている。岩を楯にして敵を防いだ、神武天皇が名倉村の石楯尾神社ね、あそこには皆さんも何度か行っていると思うが、あそこには相模川の岩がある。それで向こうからくる敵を防いだと...、そういうとこじつけだろうが、鶴間の諏訪神社は東側は土手になって、下方はずっと入江になっているということで、論社というけれども、それほどに世間では騒いでいない、むしろ土地の物知りがいいたしたのじゃないかね。明治になった時にいわゆる式内社だと。

浜田 ところが文徳実録にも、下鶴間にこれこれのものと記録されているというので、僕は文徳実録は見えていないが。

山崎 文徳実録というのはずいぶん古い。

浜田 そうするとこれはいつ頃かという、文徳というと天安元(857)年文徳天皇の当時だと...この時の実録に「日天安元年五月丙辰 近来霖雨不霽 今日京中水溢 是日在相模国從五位下石楯尾神預官社 按ずるに郡中下鶴間村、大島村諏訪社をも式内石楯尾神社と伝う(文徳実録には「按ずるに...」以下はない)」文徳実録にもそういうふう書いてある。そうするといま山崎さんのおっしゃる古老が、明治になっていたのではないかということ...。では石楯尾のいわれというのはどういうのだと考えて、いろいろ見ると佐野川の石楯尾神社の縁起に「日当御山に御鎮座御神者 神代天津日高日子波限建鷄 草葺不合尊の第四子初の御名狭野尊亦の名者神日本盤彦尊贈御名神武天皇と称し奉る。また、後において鎮の御名者石楯尾神と拜奉るなり、云々 十二代景行天皇庚戌四〇年日本武尊東夷御征せし時用ひし大盤楯を持来

り給い東国鎮護の為に今此所に置齋て守となす可くと依之此楯を賀して鎮楯という石楯とも書す即郷の県主等倉を建て納め祭る。また、この倉を賀し高座(タカミクラ)と云えり、云々」。したがって高座郡の発生の言葉も出てくる。こういうふうに書かれている。そういうことからみると、必ずしも山崎さんがおっしゃったように、古老がいったんじゃないかというようにもとれなくて...僕はこれの真実性がどうなんだかわからないが...。ただ、これでいくと楯を日本武尊が鎮める楯として持って来て、これを日本武尊は神武天皇と拜んで安置した所が石楯尾神社として祀られた。その宿营地を各所に置いたと、僕は解釈して、いろいろやってみたのですがね、伝説なんだから...

山崎 それはなかなか難しいので、これは学問的なことでいまさらひっくり返すことはできないので、今日の仕事まだ上和田・下和田が残っているので...上和田には左馬神社、下和田の方は、魚へんに青という字を書いて鯖大明神、石井正雄君に僕が、君の方はどうしてあんな字を書いているのかと聞いたら、「あれは昔、鯖が江ノ島でたくさんとれて、みんなで買って来て食べたところ、悪い病気がはやって、鯖のたたりを恐れて鯖神社としたのだ」といったがあれはどういうわけでしょうね。

柴田 祭神からして魚の鯖ではないですよ、あれは字を知らない人が書いたのでしょうか。

山崎 まず下和田の当事者から聞こう。いまどんな考えでいられるのだから。

鈴木 魚の鯖ではおかしいという話だけでも、うちの方は魚の鯖だったらいいです。結局は境川の縁の七サバ、これは全部魚の鯖だったらいいです。うちの方でも少し古い話でよくわからないが、現在の場所に神社ができたときの記録で、あまり細かい記録ではないが、左馬神社の由緒としては「桃園天皇の宝暦十四年三月徳川九代家重の代に当村の名主渡辺兵左衛門・小川清右門が、この地にお宮を建立したと伝えられる。左馬頭義朝の霊を勧遷し村民の精神修養道場となるや漸次庶民の崇敬の的となる」としてある。あそこへいく前に伝説として、現在の和南高校の所に元宮があったという話があるのです。再建した時の棟札に魚の鯖と左馬神社と2つ書いた棟札があったらしい。

柴田 今の祭神は左馬頭になっているんですね。

山崎 これは50年も前に神奈川県で作った神明帳だが、僕が県の総代会の時に写したもので、だいたいサバ神社とすると、久田に一つ左馬神社、祭神は左馬頭源義朝としてある。それから下和田が左馬神社、それからずっと下って今田が魚の鯖神社で鯖

名主命としてある。石川に佐波大神で祭神は源義朝としてある。和泉から飯田から、みんなあるのだが鎌倉郡あたりにもある。中和田村和泉に魚の鯖神社、祭神は源義朝、上飯田に鯖神社、義朝の霊としていない。下飯田にも鯖神社、上飯田の鯖神社はどこかというとはっきりわかっていない、いまは鯖神社といわない。

鈴木 鯖神社はいまの飯田の中村というところにある。中村の飯田神社。

山崎 他に源義朝に類した祭神というのは、神奈川県中にない、僕はやっぱり左馬頭義朝とすれば比較的穏やかにおっついてくると思う。境川沿岸が義朝の根拠地だったから沿岸に左馬神社があると思うが...

市川 私が聞いた範囲では、境川の流れる相当に深見神社と同じで古い。左馬頭が現れる前から神社はあった。1000年以上昔は入江で鯖がとれて、ほとんど漁村で鯖漁によって生活していた。それで昔の日本の神道は神は人間ではない。対象は生活に必要なものは金部神であった。したがってその当時1000年以上前から住んでいた人たちは、おそらく鯖を神にしただろう。それで鎌倉時代になって、とんでもない、鯖は左馬頭だと無理やりに左馬頭にさせてしまった。いろいろの争いがある、神札を見ると真中にボンと鯖の判だけ使っている。

山崎 鯖の神が左馬頭になった。

柴田 前に上和田の人たちと話し合ったことがあるけれど、これは推測の域は出ないけれども、祭神は左馬頭で渋谷庄司の時代からずっと...。和田というのは和田義盛の知行地が多かったわけです。和田氏が謀反を起こして北条氏に滅ぼされて、それで源氏は北条氏にしてみれば目の敵みたいなもので、それを祀っているとすると子孫の安泰が保てないということで、こっちの左馬神社は魚が祀ってあるのだと紛らわしい言葉で逃げたのではないかと、ただ祭神はあくまでも源義朝であって源氏の庇護を受けた人たちの領地だったから、それが北条氏が永く続いている間に魚の鯖だか人間の左馬頭だか紛らわしくなったんじゃないかという説をいう人がいる。

山崎 両方に通用するかもしれない。

鈴木 はっきりした記録は残っていないのですが、神社の由来として「古くより相模の七鯖神社の一つに数えられ、境川流域を挟んで位置しており、社名も鯖大明神(宝暦十四年甲申)・左馬大明神(文化十三年四月三日)・和田佐馬大明神(慶応二年十二

月)と変遷して、明治四十二年七月に現在の左馬神社となり村社に列せられる」とある。

山崎 石井さん、あなたは魚の鯖だといままで思っていましたか。

石井 そうですね。

山崎 義朝さんとは関係がないと思っていましたか。

石井 ええ、久田の左馬神社とうちの方はまったく同じで、本殿・拝殿ともまったく同じだったそうです。うちの方が焼ける前は。

山崎 左馬社のことは結局、ここで我々が決めたって結論はでない。

鈴木 明治 14 年にあそこへ神社を建立した時の棟札は両方書いてあったらしい。

柴田 久田のお宮には両方書いてあったそうですね、だから両方書いたというのも、その時すでに判断つかないで…。

山崎 鈴木さん、あなたの方のお宮は建て替えて、両方書いたのはいつ頃ですか、明治になってから…。

鈴木 これは宝暦 14 年に祀った時、元のお宮は上和田村の方にあったといういい伝えがあった。渡辺兵左衛門、宮久保の人と小川清右門が先にたって現在の位置に勧遷し造ったということです。

山崎 あそこの下を宮久保といったね、宮の窪だから。それからもう一つ、鈴木さん、あなたの方に内田稻荷があるでしょう。内田稻荷は生きていますか。

鈴木 生きています。社を建て替えてあります。

山崎 それから日枝社は。

鈴木 日枝社もあります。

山崎 それから鶴間の山王社は。

浜田 あれは、ご承知のように諏訪社の末社になっている。諏訪社の飛地の境内社になっている。

山崎 それから弁天さまは、

浜田 弁天さまは国有地で売れまして、河川改修で現在は観音寺の境内に移したので観音寺持に、この間話し合いのうえでしました。それで山谷に第六天、これはつきみ野にありましたが、これは北島次郎さんの土地へ移して山谷持になっている。山谷に祀ってあり山谷持になっています。

山崎 それでは上和田・下和田も一応終わりましたので、論議は尽きませんが時間になりましたので今日はこれで終わります。みなさまご苦労さまでした。

(昭和 55 年 7 月 28 日 大和市役所にて収録)

< 市内神社紹介 >

浅間神社

下鶴間 391 番地

祭神 木花開那姫命(このはなさくやひめのみこと) 大己貴命(おおなむちのみこと)
表筒男命(うわつつおのみこと)
祭日 9月15日(6月1日)
社殿・施設 本殿 拝殿 神輿殿 鳥居二基 手洗鉢 三基 石燈籠一对 狛犬一对 社務所
境内地 4384.02 平方メートル

創立年代は不詳であるが、文亀神名録写(1501～1504年 浅間神社蔵)には鶴間神社として相模 81 社の内に記載されている。当初は鶴間郷の総鎮守であったと伝えられる。大和市域の下鶴間村は北は上鶴間村(相模原市)、東は境川をはさんで鶴間村(町田市)に隣接しているが、古くはこの三村が鶴間郷であったと考えられる。しかし、『小田原衆所領役帳』(杉山博校訂)によれば、永禄 2(1559)年には、鶴間村分は小山田庄鶴間として他国衆小山田弥三郎の采地になり、上鶴間村分・下鶴間村分は東郡鶴間として御馬廻衆関兵部丞の采地になっているから、この頃境川を境に鶴間郷は二つに分れ、鶴間神社は東郡鶴間の鎮守となったものと思われる。更に天正 19(1591)年徳川家康の旗本に対する知行宛行状によれば、江原金全へ下鶴間郷、大岡義勝へ上鶴間之郷とあるので、戦国末期には上・下に分村されるが、神社は総鎮守として二村で奉斎された。それが下鶴間村だけの鎮守となるのは宝暦年間(1751～1763)で、明治 5 年の覚書によれば宝暦年間神事祭礼のことで上鶴間村(中和田分・谷口分)と下鶴間村(目黒分・公所分)との間で争論が起り、以後下鶴間村の鎮守となったと伝えている。現在相模原市中和田の長嶋神社の祭礼には浅間神社氏子総代が呼ばれるが、中和田地域が元浅間神社の氏子であったための慣習だという。その後は下鶴間村鎮守として長い間存続するが、しばしば回禄の災にあい、社殿などは荒廃し祭儀も絶えがちであったが、大正 12 年の震災で全て大破したため同 13 年に改築され、この際目黒分と別れ公所部落だけの鎮守となった。目黒分は諏訪神社を鎮守とした。また、昭和 19 年には指定村社になり部落内の住吉神社・子之神社が合祀された。更に昭和 48 年国道 16 号線大和バイパス新設により境内地を大幅に削られることになったため、元下鶴間 1437 番地から現在地に移転造営することが発願されて、昭和 49 年 9 月 15 日着工し、翌 50 年 9 月 14 日盛大にご遷宮が行われ現在に至っている。

この神社は古くは鶴間神社と記録され、いつの頃からか浅間神社と称されるようになっていて、村人は江戸時代の富士講に関係があるのではないかと伝えている。『新編相模国風土記稿』(以下『相模風土記稿』と略)には「貞享元(1684)年再建の棟札あり」とあり、宝永 4(1707)年 4 月 1 日「奉造立富士浅間大菩薩社頭一宇村里繁荣守護悠」とある棟札が現存している。宝永 4 年 6 月に

は祭神の木花開耶姫命像(当誌第2号)が造像され、また、社殿の後にあった塚を村人は富士塚と呼び、塚の上に浅間社を祀っていたという。この塚は昭和49年に発掘調査が行われ、調査団はこの塚を富士塚と断定し、少くとも宝永4年富士山噴火以前17世紀後半に存在した可能性を認めている(1980 大和市文化財調査報告書第4集)。このようなことから戦国時代の行者長谷川角行を開祖とし、近世中期以降江戸を中心に民衆宗教として発展した富士信仰が当社氏子にも宝永以前に広がり、仙元大菩薩への崇敬が高まって、標高107メートル高座郡で最も高いとされ、西に紫紺の丹沢山系を配した富士の秀麗な姿を見渡せる鎮守の境内に富士塚を構築し、木花開耶姫像が造立されたと考えれば、この間を鶴間神社が浅間神社に変る過程と見てよいのではなかろうか。

当初いかにも村民の信仰心の厚さを思わせる浅間神社も、幕末から明治・大正にかけては目黒分と公所分との間の争いの対象になって御難が続いた。年代が付していないので時期ははっきりしないが、同村金子家所蔵の「相州鶴間村鎮守浅間一件」によると、一時期目黒と公所分の争いのため別当寺である観音寺に移された神像の帰属をめぐる双方の間で訴訟問題を起した様子がわかる。この間社殿は荒廃する一方で村民の信仰の対象は子之社・住吉社・諏訪社など部落の氏神に傾むいていったが、大正13年にはようやく問題も解決され、前述のとおり公所部落だけの鎮守になり、子之社・住吉社も合祀されて改めて氏子の崇敬を集めるようになった。

現在新装なった社殿は殊に美しく、各種祭事も盛大に行われて公所住民のいこいの場所ともなり崇敬はますます高くなっている。

子之社

『相模風土記稿』には「子権現社 小名公所ノ鎮守トス。神体石 長一尺三寸回八寸許 末社稲荷」とある。現在は浅間神社に合祀されているが、元は公所上講中持の氏神で、末社の稲荷は瘡守(かさもり)稲荷と呼ばれて吹出物や疱瘡にご利益(りやく)があるとされて信仰が厚かった。患部を稲荷にある小石でなでると直るといご利益なので祠の中が小石でいっぱいだったという。子之社が浅間神社に合祀された際同部落の定方寺に移されたが、現在も信仰が続いている。

住吉社

現在は浅間神社に合祀されているが、元は公所下講中の氏神である。下講中に属する字は北から高木・下村・二津屋で、高木は公所で一番古い部落だといわれている。この三部落は境川に沿って公所の低地にあり、三つの部落をつなぐように鎌倉古道が通っている。住吉神(すみのえのかみ)は海上の守護神であるが、この社は杉の大木におおわれて参道を二津屋に向けていた

ので、地形上または津といういかにも水辺を思わせる地名から、この辺は往古舟を使うくらいの水
域であり、そのために住吉神が祭られたのではないかという説がある。

諏訪神社

下鶴間 2540 番地

祭神 健御名方命(たけみなかたのみこと)
祭日 9月6日(7月20日)
社殿・施設 本殿 拝殿 神楽殿 鳥居二基 手洗鉢
石燈籠二対 狛犬一对 札納所 社務所
境内地 15,900 平方メートル
境内末社 稲荷社 秋葉社 古峯社 八坂社
境外末社 山王社 伊勢社

創立年代不詳、元宮が現在地の東方 350 メートル位の地点にあったが、境域が狭く境川に近い
低地のため、たびたび洪水にみまわれるので台地へ移転したと伝えられる。旧跡地には宮田塚と
呼ばれる塚があったが近年宅地造成のため取りこわされた。『相模風土記稿』に「延宝 8(1680)年
の棟札あり」とある。また、古文書にあったと伝えられる記録によると「元禄 6 年 6 月(1693)に領主
江原氏代官石沢喜兵衛、同都筑氏代官瀬沼伝右衛門が本地を寄進し御神体として本殿に安置し
た(男神立像一軀現存)。元禄 7 年 2 月(1694)松五千本を植栽。宝永 8 年 6 月(1711)及び安永 7
年 7 月(1778)社殿を再建。宝永 8 年領主江原孫三郎・都筑又兵衛当神社の神威を尊敬して畑二
町歩余、水田五反歩を社領とした(宮田・諏訪面と呼ばれる田・畑があった)。」とある。その後、安
政年間に再建が行われ、社木を伐採して社殿造営の資に充て、三カ年の歳月が費されたが、安
政 5 年 11 月 6 日(1858)落成直前に工人の失火により新装の社殿を焼失した。この際、神木の囲
り一丈八尺(約 5 メートル)が焰焦し枯損した。氏子は再び再建にとりかかり、巨樹を有する者は建
築材として提供し、多くの費用や労役を氏子の協力によってねん出して、焼失した社殿に準拠した
造営を行った。丁度明治維新の時期と重なったために一時遷座式が延期されたが、明治 5 年 7 月
20 日盛大に挙行した。同 13 年には神輿一基、大幟一对が調製奉納された。幟旗の「皇澤多痕禾
果潤豊年有瑞稻梁肥」の書は單山の揮毫という。神輿は大正 12 年の震災で大破した。同 4 年
には御大典奉祝記念のため神楽殿を改築したが、この神楽殿は明治初年に村内を横断する矢倉
沢往還の宿の道沿いにある鶴林寺に建てられた歌舞伎の芝居小屋で、廻り舞台になっている。
当時東京の一流の役者呼んで興行がされ、近村からの見物客もあって大変盛んだったという。
後一時鶴間学校として使用されたあと諏訪神社境内に移築され現在に至っている。昭和期になっ
て社殿の屋根替、鳥居の再建、石垣・参道の修復が行われたが、社殿は明治以来のもので精妙
な彫刻などを現在も残している。

大正 8 年 5 月 1 日村内山王原の氏神伊勢社及び日枝社を合祀したが、同 14 年 11 月には旧に
復している。古老の話によると合祀されている間に山王原地域に災難が多く生じたという。

境内には八坂・古峯・秋葉・稻荷が祭祀され、剣道や弓道の奉納額、または各種絵馬が納められていて、戦時中の出征や誕生・七五三の祈願など氏子の崇敬がいつの時代にも変わりなく続いている。

なお、この神社は『相模風土記稿』等で延喜式内社石楯尾神社であるという伝えがあるが、石楯尾神社については従来諸考証がされている。論社は七社あり、うち現在石楯尾神社と称されている神社が三社、津久井郡佐野川・同名倉・相模原市磯部字中峯。諏訪社と称するもの三社、大和市下鶴間・座間市座間入谷・相模原市大島、残り一社は藤沢市鵜沼神明の烏森神明宮で、この神社は神明宮の境内に石楯尾神社が祀られていたという伝承がある(『式内社調査報告』皇学館大学)。現在では佐野川の石楯尾神社が式内社としては有力で、同社縁起に「十二代景行天皇庚戌四十年日本武尊東夷御征伐之砌、神武天皇昔日向の狭野より東を征せし時用ひし天磐楯を持来りたまひ、東国鎮護の為に今此所へ置斎て守と為す可しと、依之此楯を賀して鎮楯と云ふ。亦石楯とも書す。即郷の縣主等倉を建て納め祭る。亦此倉を賀して高座と云へり、武尊勅に依て石楯を置たまふ。故に当御社を高座石楯尾神社と申奉るなり」とあり、「石楯尾」は「石楯置」であると説明している。この神社が津久井郡であること(『相模風土記稿』では往古佐野川は高座郡内であったとする)や「石楯尾」の解釈の問題で異論があるが、一応佐野川の石楯尾神社を式内社とする説が多い。

p34「諏訪神社奉納品一覧」も参照のこと

深見神社

深見 3367 番地

祭神 武甕槌命(たけみかづちのみこと) 健御名方命(たけみなかたのみこと)

祭日 9月15日(11月)

社殿・施設 本殿 拝殿 神楽殿 鳥居五基 手洗鉢二基 石燈籠一对 狛犬一对 神饌舎
社務所

境内地 4105.79 平方メートル

境内末社 御倉稻荷社

摂社 靖国社

境外末社 八雲紳社 八坂神社

深見は承平年間(931～938)に編まれた『和名抄』に深見(布加美)郷として記されている文献上市域内最古の記録をもつ地域で、深見神社は市内唯一の縁起式内社である。創立年代は不詳であるが、『総国風土記』に「深見神社或深水・深海ト作ル 雄畧天皇二十二年三月所祭闇(くらかみ)也」とある。闇は古来祈雨・止雨の神として祀られる神であるが、縁起には「武甕槌神 東国鎮撫のために常陸鹿島に在られた時、舟師を率いてここに進軍され、伊弉諾神(いざなぎのかみ)の御子、倉稻魂神(うかのみたまのかみ)・暗神の二神をして深海を治めさせられた。両神は深海を治めて美田を拓き、土人を撫して郷を開かれた」とある。真偽は別として市域内屈指

の由緒ある古社とみてよい。現在暗 は倉稻魂神と共に境内の御倉稻荷神社に祀られている。祭神の武甕槌神は近世における深見領主坂本家の常陸国鹿嶋神宮尊信により、鹿嶋神宮祭神の分霊を勧請したものとされる。坂本氏は天和2(1682)年当主重治が寺社奉行に任じられ、相模国高座・常陸国鹿嶋・下野国那須等の内一万石を領した家柄で、家系は常陸介小瀬三郎義春の後裔で、義春も常陸国の内千貫文を充行われていたことなどから、常陸国とは関係が深く、殊に鹿嶋神宮への尊崇が厚かったと伝えられている。このような事情から氏子も深見神社を鹿嶋社として崇敬するようになっていった。富澤家所蔵の文政9(1826)年2月の「村方取調帳」には「相模国十三座之内鹿嶋大明神 祭神武甕槌 神躰御幣 祭礼年々十一月中、日不定十二座執行 仕候、除地社地者山也三反坪 神木右鹿嶋大明神之社地廻り凡三丈程之松壺本有之候、社地之木何連も壺丈七・八尺程 神主・別当・修験無之村持二御座候、毎年十一月祭礼之節鎌倉郡瀬谷村宝蔵寺来て法楽ヲなす 末社稻荷一字 鳥居木鳥居、此外二石碑壺基有之候、相模国十三座之内深見神社と認あり、本殿・拝殿鹿嶋大明神本社式間・式間半 同拝殿横式間・豎三間」とあり鹿嶋大明神として報告され、『相模風土記稿』でも鹿嶋社として掲載している。明治維新後郷社としての社格を得るが、この時も鹿嶋社と指令されたものをあとで申請を出しなおして「相模国高座郡深見神社明治六年十二月被列郷社候事」の社格状を得たという経緯がある。この時期には既に鹿嶋社としての呼称が氏子に深く浸透していた様子がうかがえる。

明治9年に隣地仏導寺の出火に類焼して社殿等悉く焼失した。その後神域は荒廃し社格も一時失ってしまったが、明治42年には村内の諏訪社を合祀し村社として氏子の崇敬が存続された。

諏訪社は深見神社の北方島津と坊ノ窪の間の諏訪山に鎮座して、祭神建御名方神、創建等不詳であるが江戸期には鹿嶋社と共に領主坂本家の尊崇が厚く、明和2(1765)年の文書によれば両社へ領主から幟が寄付され、祭礼も両社隔年で行われて、村の鎮守として村民の崇敬を集めていた神社である。

社殿は回祿後仮殿のままであったため、本格的造営が何回も企てられたが実現されず、ようやく昭和15年9月深見神社奉賛会が組織され、同16年11月本殿・拝殿・神饌舎・玉垣・社務所等を再建した。同17年3月25日には氏子の努力により社格も郷社に復帰された。戦後社格は廃止されたが現在も境内はよく整備され、古社の威厳が立派にたもたれて氏子の崇敬もますます厚い。

なお、境内に祀られている靖国社はもと厚木航空隊の守護神として同隊の戦死者を祀っていた社であるが、終戦により取り除きを命じられたため深見神社に移築し、深見部落戦没者全員を合祀し、昭和23年4月7日鎮座祭を執行し、摂社として祀られた。毎年四月桜花の開く頃、祈念祭が行われ全国の遺族が参拝に訪れている。

境外末社として一ノ関部落に八雲神社、入村・坊ノ窪部落に八坂神社があり共に須佐之男命を祀り、祭礼日には神輿が出て大変にぎやかなお祭りになる。

熊野神社

上草柳 905 番地

祭神 須佐之男命(すさのおのみこと) 速玉之男命(はやたまのおのみこと) 伊邪那岐命(いざなぎのみこと) 事解之男命(ことわけのおのみこと)

祭日 9月23日(9月11・12日)

社殿・施設 本殿 拝殿 鳥居 手洗鉢 石燈籠三対

狛犬一対 祭器具庫 社務所

境内地 1279.37 平方メートル

境外末社 桜森稻荷社

創立年代は不詳であるが、上草柳はもと深見村に属していて、分村したのは元和2(1616)年頃と考えられている。村の鎮守となったのはこの頃であると思われるが、この村には引地川の水源があり、その附近の四軒から開発が始まったと伝えられることから、始めから集落の成立に独自性があったものと考えられる。したがって氏神としては分村以前から祀られていたものであろう。棟札によれば元禄7(1694)年5月に上・中・下草柳村総氏子により熊野社大権現宮の造営が行われている。また、弘化2(1845)年2月に熊野三宮大権現を改めて勧遷して村民の崇敬をさらに厚くした。一説にはこの時の勧遷は天保の飢饉(ききん)の際、非常に難渋したためだという。

草柳村が上・下に分かれたのは寛永2年～正保元年(1625～1644)の間と推定されているが、熊野神社は上・下分村後も両村の鎮守として祀られた。『相模風土記稿』にも「上・下二村の鎮守」とある。

その後明治期になって下草柳部落に山神社が祀られることになり、上・下部落それぞれ別の神社を奉斎するようになった。

昭和30年から40年にかけて厚木基地の滑走路の拡張に伴う部落移転が行われたため氏子の大部分が離散し、社殿は一時荒廃したが昭和52年総氏子の発願により大がかりな再建がされた。昭和52年4月12日総工費一億三千万円で着工され、同53年9月22日熊野本宮の分霊を改めて勧請して、翌23日遷宮奉祝祭が盛大に挙行された。いま真新しい社殿がいかにも荘厳である。

桜森稻荷社

熊野神社の末社で弘化2(1845)年2月熊野神社において熊野三社大権現宮を勧遷し、五穀豊穰祭を行った際、熊野神社の「死気年」除けとして稻荷社を建立し、稻倉魂命を奉斎したと伝えられている。鎮座地には七・八百年を経たという桜の古木があり、社殿が建立された時桜木が更に

植樹され、参道は桜並木になっていたという。桜森稲荷と称される所以はこのことに依ると思われるが、この神社もまた古い桜木の伝説(源頼朝が鷹狩に来て馬をつないだ桜木だという)などから、弘化2年より以前に元宮があったのかもしれない。桜花満開期の祭礼はさぞにぎわったろうと思われるが、いま、その桜樹は四・五本程が残されているだけである。しかし、現在社殿が再建中でかなり工事が進行している。近年中には立派に再興され、更に氏子の崇敬が高まることになるろう。

山神社

中央5丁目6番3号

祭神 大山祇命(おおやまつみのみこと)

祭日 10月中旬(9月13日)

社段・施設 拝殿(中宮) 鳥居二基 手洗鉢 石燈籠二対 狛犬一对 祭器具庫 社務所

境内地 813平方メートル

境内末社 稲荷社

草柳村が上・下に分村し(1625~1644)、当時から草柳と称された深見村の開拓地が中村部落として下草柳村に帰属して、下草柳村は中村・六軒・大下の三部落により営まれるようになった。鎮守は深見村の山王塚に祀られていた山王権現を各部落ごとに山王社として奉斎し、祭りは本蓼川材の巖城院の修験者が来て法楽を奉り、三部落が同じ日に行った。当初は各部落持の鎮守で、村社としては上草柳村の熊野神社を崇敬していた。山神社はこの三部落の山王社が明治政府の神仏分離令により三社が六軒部落の山王社に寄せ宮されて山神社として祀られた時からで、鎮守としては比較的新しい歴史を持っている。独立した時の氏子は中村20戸、六軒20戸、大下17戸、計57戸であった。この土地は江戸期には谷戸田が多く耕地整理が行われる前は米の収穫は非常に少なく、戸数も少ない上に村を三人の領主が治める(幕末 石川八十郎三七石・宅間朔之丞四四石・駒井孝三郎四七石)という合給地なので、神社管理の負担はかなり重かったに違いない。安政二年宅間領の鎮守屋根替の寄進帳が残っているが、寄進は大豆で戸数17戸、名主が一斗、他が平均四~五升を寄進している。祭りも農作物の不作のときには取り止められた。毎年9月1日頃に風祭りをを行い、この日に部落総出で川さらいをして、そのあとで祭りを行うかが決められた。もっともこういうことはこの部落に限ったことではなく、公所の浅間神社や深見の深見神社でも毎年祭りが祝われたわけではなく、不作の年には止むを得ず中止されている。また、祭日は9月13日から10月中旬に変わったのだが、養蚕の晩秋蚕の上簇に合せたものである。このことも他の神社でも行われたことで、七・八月の祭日は十月以降に変わってゆく場合が多い。どの村でも養蚕は大きな収入源であったため村の行事の多くは養蚕に大きく左右されていた。

戦後当地は上草柳部落と同じく、厚木基地の滑走路拡張により氏子が集団移転したために、昭和43年六軒部落から現地へ移転造営された。末社の稲荷社や部落内の道祖神・庚申塔なども境内に同時に安置されている。現地は街中で境内はこじんまりしたたたずまいである。桜が植え

られ、赤い鳥居や石燈籠、狛犬が配置された参道がにぎやかで、下町風な親しみやすい神社になっている。

左馬神社

上和田 1168 番地

祭神 左馬頭義朝

祭日 9月24日

社段・施設 本殿 拝殿 神楽殿 神輿殿 鐘楼 鳥居二基 手洗鉢 燈籠一对 狛犬一对

境内地 3691.82 平方メートル

境内末社 三社殿 八坂神社

創立年代は不詳であるが、宝暦 14(1764)年三月に名主渡辺兵左衛門・小川清右衛門がこの地に宮を建立したと伝えられている。

元宮が部落内城山の附近にあったという伝えもあるので宝暦 14 年頃移転再建されたとも考えられる。祭神は左馬頭義朝である。神社の東側で村境を流れる境川をはさんで義朝を祀ってある神社が七社(上和田の左馬神社、下和田の鯖神社、高倉の七つ木神社、今田の鯖神社、下飯田の鯖神社、上飯田の飯田神社、橋戸の左馬神社)あるが、徒歩で約一日で巡礼できる位置にあり、昔から七サバ参りと称して疱瘡・麻疹・百日咳にご利益があるという信仰がある。左馬神社はあまり他所には祀られていない神社であるが、境川沿いには集中してある。この地が中世源義朝の領地であったからという説があるが、左馬を鯖と書く神社も多いのでゆえんについて諸論がある。例えば『相模風土記稿』では上和田が佐馬明神社、橋戸が左馬明神社で他の五社は鯖明神社となっている。上和田の左馬神社も宝暦十四年の棟札には鯖明神社であったという。なぜ左馬でないのかということで、左馬頭説・鯖説・サンバイ説・他に裂く神であるなどと解かれるが、地元では鯖は左馬の仮借であろうとする説が多い。いずれにしても確証はない。

境内の神輿殿は八坂神社のお飯屋で、7月14日には盛大な夏祭りが行われ神輿がかつぎ出される。三社殿は中央に天照皇大神、右に神武天皇、左に須佐之男命を祀ってある。社殿は神楽殿と共に昭和 51 年に改築された。神楽は明治 3 年の村明細帳によると寺尾村本間祐久神楽を奉納したとあるが、現在は里神楽が氏子により伝承されている。また、この神社には鐘楼がある。市域南部の上・下和田・福田の神社には鐘楼が神社境内に付設されている場合が多いが、神仏混淆の名残りであろうか、もと大和町地域の市内北部にはまったくなく梵鐘は寺に属している。現在の神鐘は昭和 29 年に鑄造されたものであるが、戦時中までは文政 11(1828)年 6 月鑄造と伝えられる鐘があった。昭和 18 年に国に供出してしまったが、その銘文の写が残っている。

総高四尺一寸三分 笠形二寸八分 鐘身二尺七寸三分 口径一尺七寸四分 厚サ二寸四分
撞座径三寸八分 同高四寸六分 乳五段五列四面ニテ一〇〇 縦帯四各二計八

掛畏佐馬大神者相陽鎌倉高座之境乎流川迺左右仁宮柱太敷立七箇所之内仁鎮り坐又一則之御神二而靈驗殊二新二然往右當社有之所鐘中津頃破却シテ無之猶今般氏子致丹情令再建也庶幾奉天下泰平五穀豐登御當主御武運長久邨中蒼生子々孫々安全祈耳

干早振神迺綿娛 民乃双方琉馬斯 安吉迺舟戾穗之 苔細甫樓徳門 小川敬道拜白 和田佐馬大明神 相州高座郡上和田村

氏子寄進連名 金五両小川仲右衛門 金四両小川孫左衛門 金三両二分 岩崎五郎左衛門 金三両仲戸川奥右衛門 金二両二分小川金蔵 金二両一分仲戸川利左衛門 金一両三分二朱渡辺市郎左衛門 金一両三分小川六左衛門 金一両二分小川重兵衛 同仲戸川次郎右衛門 同小川八良右衛門 同小川四良右衛門 金一両一分渡辺源太良 金一両三朱柏木久右衛門 金一両二朱神谷傳左衛門 金一両渡辺吉右衛門 同神谷佐五右衛門 同小川市左衛門 同岩崎又兵衛 同小川太良兵衛 同渡辺四郎左衛門 同渡辺六良右衛門 同杉崎市郎兵衛 金三分二朱小川惣左衛門 金三分遠藤傳右衛門 同杉崎半右衛門 同仲戸川権兵衛 金二分二朱柏木由右衛門 金二分岩崎弥五兵衛 同小川権右衛門 同青山治右衛門 金一分二朱柏木平左衛門 同柏木長左衛門 同仲戸川空左衛門 金一分露木又右衛門 同露木儀左衛門 同近藤久平 同仲戸川六右衛門 文政十一戊子年六月吉日 金三朱杉崎宗兵衛 同柏木孫兵衛 同柏木徳右衛門 同柏木甚右衛門 同渡辺藤右衛門 金二朱青山五右衛門 同杉崎兵右衛門 同渡辺長兵衛 同神谷次郎左衛門 鏝二百文仲戸川右衛門 金五両世話人神谷干兵衛 其外當村下分惣氏子中 鑄物師江戸扮川市正藤原國信

文面から文政 11 年以前に鐘があったことが知れるが、社殿が建立された当初から梵鐘があったものと思われる。

部落を江戸時代からの主要道である中原街道が横断していて、現在かなり騒音が激しいが、それを四・五〇メートルさけた境内は樹木も多く閑静なたたずまいである。

鯖神社

下和田 1110 番地

祭神 左馬頭義朝

祭日 9月26日

社殿・施設 本殿 拝殿 鐘楼 鳥居 手洗鉢 石燈籠一对 社務所

境内地 1,233 平方メートル

『相模風土記稿』に「鯖明神社 村内鎮守トス。寛文十(1670)年十二月ノ棟札アリ。真福寺持、鐘楼・鐘八宝曆四(1754)年造。末社荒神、稻荷」とある。境内には樹令 700 年以上の老松がそびえていたという。この神社も境川沿いの七サバ神社の一つで、鯖か左馬かの論にわかる神社であるが、昔あった社額は「左馬」であったといい、釣鐘や寛政元(1789)年の常夜燈には「鯖」が使われている。鐘は昭和 18 年国に供出されたが銘文の写が残っている。

総高四尺一寸 笠形一尺二寸 鐘身二尺九寸三分 口径二尺三寸 厚サ二寸七分 鐘身径二寸五分 同高二分 乳四段二十列

洪鐘新製寄器海?靈神振徳衆人結縁韻徹遠近銘體黄玄緇素大村里聽鮮降伏魔力然除結盡元余露地擊捷菩薩聞當集諸?聞法人度流生死海此聞妙響音盡當雲集此矣 諸行死常是生滅法生滅々已寂滅為樂一切衆生悉皆有佛性如来常住死有反易一打鐘聲當願衆生脱三吸苦得見菩提矣 鯖宮山乘蓮院興福(真)寺第十世 法印賢雅住職砌鑄焉

家臣 神官寺六右衛門 完倉彌太夫 小林善太夫 領主辻重次郎

願主大津伊兵衛 政元 惣産子 維時寶曆四申戌年十一月吉日 相陽愛甲郡下荻野村大土木村八郎右衛門吉重

現在社殿はかなり荒れているが、昭和 15 年 1 月 29 日に回祿の災があり社殿が焼失した。それ以前は上和田の左馬神社と同じ宮作りであったという。この部落は市域では一番面積が狭く氏子数も少ないが、信仰の形体は各氏別、または各種の小集団によって祀られている稲荷中心の信仰が非常に厚い。

福田神社

福田 5148 番地

祭神 大己貴命(おこなむらのみこと) 大山祇命(おおやまつみのみこと) 須佐之男命(すさなおのみこと)

祭日 7 月 14 日

社殿・施設 本殿 拝殿 鳥居二基 手洗鉢 石燈籠二対一基 狛犬一対 祭器具庫 社務所

境内地 872 平方メートル

境内末社 伏見稲荷社 第六天

福田神社は昭和 36 年に境橋部落の氏神日枝社と山下部落氏神の子之社が合祀されてできた神社である。日枝社は慶長の初期柴田家の先祖が美濃から移住し、滋賀の日枝社を分霊し祀ったと伝えられている。柴田氏は福田開発九人衆(神明社の項参照)の小林大玄の屋敷跡に住居を定め、新五左衛門・沢右衛門・空之助・平四郎・源五左衛門・半兵衛の柴田一族六軒で集落を形成し、境橋部落を開発して氏神として日枝社を祀った。始め山王藪に祀ってあったものを寛文元(1661)年に境橋部落の中の福田 4802 番地に新しく社殿を造営遷座した。その後嘉永 6(1853)年 2 月改築が行われ明治に至っている。

子之社は福田開発九人衆のうち田辺因幡守・山下半哉・広瀬藤八などが居住した松木ヶ谷戸の氏神で、天文 14(1545)年の鐔口が現存している(大和市文化財調査報告書第 5 集)。

銘文(表)

奉納 松木子大明神 建立本願主 山下東彌與治右衛門

相州高座松木谷都 天文十四乙巳年九月十九日

(裏)

志 甲斐山下與兵衛 肥後山下文彌 願郷家豊楽

この銘文に甲斐・肥後とあるが山下家は甲斐から移ってきたといわれているので、山下一族の発祥を考える上でも参考になる。肥後地方にも現在山下姓が非常に多い地域があるという。この他に棟札が7枚残っているが願主は山下姓がほとんどであるから、当初山下一族の氏神として祀られていたのであろう。延宝3(1675)年再興の棟札がある。また境内に午頭天王を祀り7月14日の祭りには神輿がかつがれた。

この両社は明治6年に一度子之社へ合祀されたが同8年には分離し、日枝社は元の場所に戻っている。日枝社の氏子はすべて柴田姓で日蓮宗であったため、社前で「南無妙法蓮華経」と題目を唱えることもあり、結局民情的に相入れないものがあつたようである。しかし、昭和36年頃厚木基地との関係で境橋部落が移転することになり、それに伴い神社の移動が氏子中で計られ、再び子之社と合祀して現地に福田神社として奉斎することになった。

この地域には福田神社囃子獅子舞が伝承されていて、祭礼には豊作祈願、年頭には災難除けを願って氏子中を門付けし、部落中をねり廻る。昭和44年に大和市無形文化財に指定され、市内では一番大きいお囃連中である。

神明社

福田 528 番地

祭神 天照大神

祭日 9月中旬

社殿・施設 拝殿(中宮) 石燈籠台一对 祭器具庫 参集殿

境内地 1020.93 平方メートル

境内末社 稲荷社

創立年代は不詳である。福田村には「福田盟約書」と呼ばれる中世文書の写が二・三種残っている。

「 相定候一札之事(写)

我等此度保田筑後守永正二(1505)年此所へ来り、田辺因幡守同四年来り、広田刑部之助同十六年来り、斉藤民部・小林大玄同十七年来り、山下半哉・駒井文太夫大永元(1521)年来り、広瀬藤八・市川源兵衛同 (二)年来り、以上九人之者者以相談東西南北之境定者也、

火事御座候共早速欠付相志すめへき事

一其村置手之事 保田筑後守 田辺因幡守兩人之儀者此所草切二候得八何二而茂 仰出候相背申間敷事、

筑後守里南善谷、因幡守里松木谷、刑部助里根下谷、此時福田村二名付たり、誠二家々子孫迄相守り 申者也、仍而一札如件、

大永四(1524)年申ノ二月四日

広田刑部(之)助

斉藤民部

駒井文太夫

広瀬藤八

市川源兵衛

山下半哉

保田筑後守殿

小林大玄

田辺因幡守殿

家々子孫迄因幡殿此一札預り

印

(関水一夫家文書)

この掟書によると引地川沿いの三ヶ所に地域を定めて九人が住みついた様子がわかる。北から松木ヶ谷(境橋・山下)に小林大玄・広瀬藤八・田辺因幡守・山下半哉。南善ヶ谷(代官庭)に保田筑後守。根下ヶ谷(中福田・下福田)に斉藤民部・広田刑部之介(現関水家)。駒井・市川が不明であるが、大体このように住居をかまえた形跡がある。そしてそれぞれに小集落を形成して神を祀り村の開発が徐々にされた。現在まで祀り続けられてきた福田の神社は小さく分ければこの小集落の氏神であったと考えられる。すなわち、境橋部落の日枝社、山下部落の子之社、代官庭部落の田中八幡社、中福田部落の神明社、下福田部落の若宮八幡社である。

神明社を氏神とする中福田は福田開発九人衆のうち斉藤民部が住した所で、他に市川・張ヶ谷・山口・吉川・安藤姓の六軒で掟書にある南善ヶ谷と根下ヶ谷の間に別の集落を作るようになり、氏神として神明社を祀って神明谷戸と呼ばれる部落を形成していった。

神明社の社殿は昭和9年の「渋谷読本」によると明和3(1766)年に再建されたとある。現在残っている棟札には天保2(1831)年に豆州大工山本友吉により本殿を改造し、同年10月御遷宮を行ったことが銘記されている。同5・6年には負殿・拝殿を増築し、その後明治36年に神楽殿を建立している。大正12年の震災により破損したが大修築が行われて現在に至っている。

最近神楽殿がこわされ参集殿が新築された。境内も整備され参集殿が住民の集会所になっているので氏子の交流の場としても親しまれている。

田中八幡宮 (正八幡宮) 代官 1 丁目 20 番地 20

祭神 応神天皇

祭日 9 月 15 日

社殿・施設 拜殿 中宮 神楽殿 鐘楼 鳥居 石燈籠 祭器具庫

境内地 1,190 平方メートル

境内末社 坊主八幡社

『相模風土記稿』に貞享3(1686)年9月上飯田村の本興寺(日蓮宗)住僧が再興した棟札があるとあり、伝承によれば元龜・天正の頃、代官保田筑後守が鬼門除けの守護神として八幡山に祀ってあったものを、貞享年代に現在の地に遷座し、代官庭部落の氏神として崇敬したという。祭神の応神天皇の騎馬像が安置されているが、やなくいを背負い、弓を持ち、馬に乗っている彩色像で、弓矢の神をほうふつとさせる勇壮な神像である。胎内に銘札があり(当誌第2号)嘉永3(1850)年11月に開眼したことが知れる。

他に棟札が二枚あり(当誌創刊号)嘉永3年6月4日の再建と嘉永4年2月に福田村保田弥惣兵衛が、正八幡大菩薩の御前で法華經の寿量品を二百巻奉誦したということがわかる。この氏子はほとんど日蓮宗であるが、神仏混淆の信仰のあり方がうかがえて参考になる。また、この神社にも梵鐘があり、天保6(1835)年鑄造の銘文が残っている。

総高三尺八寸 笠形二寸五分 鐘身二尺六寸三分 口径二尺六分 厚サ二寸三分 撞座径二寸三分 同高三分 乳五段五列四ヶ所 乳別口一段二列四ヶ所 下帯若葉ノ模様アリ 正面並二裏面共中央二正八幡大菩薩 横中央二右側五穀成就 左側天下大平 下二相州高座郡福田村 総氏子中金拾両氏子若者共

奉再建推鐘仏法槃昌 廣宜流布一天四海皆歸 妙法氏子安穩者也 開眼主法華山四十有三世日慈花押 天保六乙未年九月吉日 御鑄物師西村和泉守藤原政時作

太良兵衛 平左衛門 金左衛門 太左衛門 伊左衛門 徳兵衛 太次衛門 兵右衛門 蔵右衛門 勘兵衛 源左衛門 久右衛門 甚五兵衛 嘉左衛門 良齊 五郎右衛門 瀬兵衛 彦左衛門 權左衛門 庄左衛門 五兵衛 新左衛門 治郎右衛門 紋兵衛 彌惣兵衛 四郎左衛門 太右衛門 安右衛門 政右衛門 十郎左衛門 縫左衛門 茂作 七郎右衛門 森右衛門 三左衛門 彌兵衛 佐五右衛門 三郎右衛門 源左衛門 藤右衛門 九郎兵衛 丹右衛門 八左衛門 杉右衛門 清右衛門 十兵衛 太郎左衛門 半右衛門 甚左衛門 忠右衛門 藤八郎 與五左衛門 半七 三郎右衛門 又左衛門 藤四郎 勝兵衛 權左衛門 四兵衛 勘右衛門 三郎兵衛 久作

彦兵衛 太左衛門 又右衛門 治右衛門 與三左衛門 市郎左衛門 伊兵衛 七郎右衛門 ヤマシタ惣左衛門 サカシタ周蔵 安兵衛 タデカワ石吉 同菊次郎 円行治郎兵衛 同佐次兵衛 ツルマ八五郎 中福田庄兵衛 村直蔵 太兵衛 戸塚金兵衛 作兵衛 傳右衛門 紋左衛門 世番人保田八郎右衛門 同仁右衛門 同太七 同忠左衛門 同代興五兵衛 同代佐右衛門 同助左衛門 廣瀬太兵衛 山下郷左衛門 同與右衛門 同利右衛門

境内に坊主八幡と呼ばれている社殿があるが成立などは不詳である。本殿を再興した本興寺の僧との関係があるのかもしれない。最近では引地川の河川改修に伴い宅地造成が進み、境内の周辺はほとんど家並だが、以前は田圃の中に鎮座しているため田中八幡様と呼称されて村人に親しまれていた。現在田圃の面影はまったくない。

また、この地域には田中囃子が保存会により伝承されていて、昭和 53 年に大和市無形文化財に指定されている。

若宮八幡宮

福田 509 番地

祭神 仁徳天皇

祭日 9月16日(8月16日)

社段・施設 拝殿(中宮) 神楽殿 鐘楼 鳥居 手洗鉢

石燈籠一对 木燈籠二基

境内地 1550.98 平方メートル

境内末社 稲荷社

創立年代は不詳であるが、田中八幡宮(正八幡宮)の若宮と考えてよいのではなかろうか。この神社を祀る根下ヶ谷部落の開発は、田中八幡宮を祀る代官庭部落(南善ヶ谷)と同時期と考えられるので、多少時代が下るとしてもはほぼ同じ経過をたどって来たものと思われる。社殿内に仁徳天皇像と伝えられる御神像が祀られている。衣冠束帯、腰に太刀を佩き、棒状の持物を両手で持つ座像である。上畳座裏の銘文(当誌第2号)によると延享3(1746)年2月吉日に江戸仏師法橋助教が造像し、文化9(1812)年8月に吉見兵部が修理していることがわかる。社殿は元禄11(1698)年再興の棟札があったと『相模風土記稿』にあり、石段元文3(1738)年6月、梵鐘寛保2(1742)年2月、常夜燈寛政3(1797)年正月建立の銘がある。梵鐘は戦時中昭和18年12月8日供出されたが銘文が残っている。

総高三尺四寸五分 笠形二寸九分 鐘身二尺七寸 口径二尺 厚サ一寸三分 撞座径二寸七分 同高七寸三分 乳四段二十列

相州高座郡福田村若宮八幡宮鐘銘序

蓋開娑婆世界是依音聲得道夫推鐘者依帝釈聲論曰梵提推此翻鐘增一經曰信鼓皆鐘異正也
為其功德乎？ 咤聞推鐘脫於千頭魚劔論江南民依先主告薦高帝除其厄故阿含經曰若聞鐘聲除
五百億劫生死重罪千茲有人名關水市右衛門尉正本盟誓總代富田新右衛門嘗勸衆人盟誓契諾
而得造此推鐘此鐘懸于福田也若宮八幡宮謂此神仁德天皇陵 大鷦鷯神也本地藥師佛或聖觀
音此社東自護江戸武城南自濟國民貌西廣原平平乎顯天下太平粧北林樹森々乎垂本迹一如慈
此社權輿未託然中古此處地頭武都中根氏感 (靈)夢建立當社恭神威更 於和光日洪德別當
名蓮慶寺尤是此邑惣鎮守神宮寺也我名諦実阿闍梨自作鐘銘曰 誓鳴鐘濟苦 集衆來守護 鐘
響群生覺 聲遍十方土？ 王免苦 江南民主聞 脫生死獄器 五億却重罪 現身頓謂世 供期
龍花曾 大鷦鷯神社 等遊不二臺

寛保二壬戌年二月十一日良為

福立山蓮慶寺現住沙門諦実欽記

(梵字)

中根氏武運長久

家老 南條十郎右衛門

馬場安左衛門

願主 関水市右衛門尉正本

盟誓人總代 富田新右衛門

惣氏子中

冶工 相州愛甲郡下荻野村 木村八郎兵衛吉重

供養料加入 関水吉兵衛

同 富田五左衛門

この銘文によれば地頭中根氏の靈夢によって神社が建立されたことになる。

大正 12 年社殿など震災で損傷をうけたが修復されて現在に至っている。境内は小高い場所にあり氏子の家々を見おろせる位置で、参道は石段になっている。この地域も開発が進んでいるがまだ村の鎮守の様相が残っている閑静なお宮である。

注 梵鐘の銘文はすべて「神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第十四集」供出梵鐘調昭和 13 年による。

< 諏訪神社奉納品一覧 >

昭和 55 年 10 月 16 日から 1 週間下鶴間の鎮守諏訪神社の奉納品等の調査が、地元の賛同を得て市史編さん事務局により行われた。

社殿は明治 5 年の再建である。安政 5 年再建中であつたものを不慮の失火により焼失した後の造営であるため、中宮を除きすべて明治 5 年以降のものである。

今回の諏訪神社調査では計 31 点の奉納品を採訪することができたが、この内容は表 1「諏訪神社奉納品一覧表」(後段掲載)のごとくである。これでわかるように、絵馬が 23 点で一番数が多い。よく知られているように、絵馬は寺社に願いごとをするときに奉納するが、そのもともとの発生は生きた馬のかわりに馬の絵を額に描いて奉納したといわれ、室町時代から特に隆盛になった。これがのちに動物・花鳥・風俗・山水や歴史とか伝説で有名な人物などを描くようになった。

当社の絵馬 23 点で奉納年代のわかるのは明治 20 年～大正 11 年に至る 7 点で、他は年次不明であるがいずれにしても明治以後の奉納である。ここに描かれている絵柄は 18 枚が奉納者の祈願の図で、他は動物の図 2 枚、俳句等文字 2 枚、七福神 1 枚となっている。こうした中には、明治 37～8 年日露戦争から凱旋した下鶴間柴田氏が「軍服をぬいてくつろくすすみか (な)」、とうたった一句があり、いかにも感じのわかる、かわった絵馬もある。無事凱旋を祝つての奉納であろう。当社にある絵馬は別に芸術品等というものではないが、下鶴間の人々の生活の一側面がうかがわれるようである。

絵馬の外に、明治 11 年 12 月から昭和 14 年 11 月までの 8 枚の奉納額がある。明治 14 年 1 月太々神楽祈祷、同 41 年 10 月の戊申詔書を額にして奉納したり、大正 11 年 9 月の明治養蚕組合創立 15 周年記念奉納額、そして一番新しい昭和 14 年野島三趣翁の頌徳額などがあるが、これら奉納額の中に明治 19 年 10 月 15 日の北辰一刀流豊田平之の奉納額がある。幕末の大和市域には剣道がはやり、近藤勇の流派天然理心流や玉影流などがあつたことは市史の近世資料編に見られる。武術に関する奉納額は、福田の田中八幡に奉納された明治 5 年天然理心流の奉納額がこれまで唯一のものであつた。天然理心流奉納額は縦 91 センチ、横 153 センチの大きなもので、ここに上和田村保田氏・小川氏、福田村山下氏など天然理心流 136 名の人達の名が記されている(「大和の文化と伝貌」第 11 集)。

当社の北辰一刀流奉納額は縦 182 センチ、横 273.5 センチで、福田の天然理心流奉納額よりはるかに大きい。通常剣道の奉納額は、中央最上部に「奉献」あるいは「奉納」と横書し、その下に木刀二振りを架け、その左右に奉納関係の代表者、下に賛助した人達の連名がある。当社の奉納額もこれと同じで、右端に「北辰一刀流願主 豊田平之」と 1 段で大書し、その左に 4 段に分けて連名がある。1 段目中央に「奉献」とありここに一つの署名があるが、幕末で著名な山岡鉄舟である。奉献の右側に 3 つの流派の代表者 9 名、左側にも 9 名が連名し、その下の 2 段めと 3 段めに各 51 名、4 段めに 41 名、合計 161 名の名前がある。4 段めの人達は下鶴間村在住の者で、奉

納に当たっての「幹事」として高下氏・井上氏・古木氏・長谷川氏、「世話人」として和田氏・土屋氏その他の人々の姓名がみられる。

この奉納額は北辰一刀流豊田平之が願主となっているが、右の連名には連名者の流派あるいは居住地を記している。居住地は横浜から八王子まで実に広い範囲の人々が集まっている。福田田中八幡の天然理心流奉納額にくらべてこの点が第一の特色であるが、もう一つとして天然理心流のそれは同一派に限定されていたのに対して、この奉納額には4流派が集まっていることがあげられる。北辰一刀流・鏡心明智流・無刀流・天然理心流の4流派であるが、いずれも近世後期に成立したいわば新興の流派である。北辰一刀流は幕末の三剣士といわれた著名な千葉周作を流祖とし、幕末には最もはやった流派の一つである。鏡心明智流(通常は鏡新明知流と書く)は桃井直由が流祖であるが二代目桃井春蔵直一が有名で、千葉周作・斎藤弥九郎と共に三剣士の一人である。無刀流は山岡鉄舟が流祖である。鉄舟ははじめ千葉周作に北辰一刀流を学び、のち無刀流を開いた。天然理心流については近藤勇の名をあげるだけでよからうが、三多摩を中心として神奈川県では特に県央以北に流行した。天然理心流に対して、北辰一刀流や無刀流、特に鏡心明智流などはどの程度県域に分布したかほとんどわかっていないのが現状であるので、この奉納額は後日詳細に検討する必要があるし、更にこの保管には特別に手をうつ必要がある。なお奉納額裏面には、「奉額 願主 豊田平之」と、更に剣道の稽古道具の面が描かれている。

「明治十一年十二月奉納額」「明治十四年一月 天照皇大神宮太々御神樂奉納額」
「大正四年四月 鶴間矯正会奉納額」「大正十一年九月 明治養蚕組合創立十五周年
祈念奉納額」については掲載を省略しました。(神崎彰利)

明治四十一年十月 戊申詔書

「 戊申詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ
東西相 (倚)リ彼比相濟シ以テ其ノ福利
ヲ共ニス朕ハ爰ニ益団交ヲ修メ友義
ヲ惇シ列国ト共ニ永ク其ノ慶ニ頼ラ
ムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ
伴ヒ文明ノ恵沢ヲ共ニセムトスル固
ヨリ内国運ノ発展ニ須ツ戦後日尚浅
ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一
ニシ忠実業ニ服シ勤 (儉)産ヲ治メ惟レ
信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ実ニ就
キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑我カ神望ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光
輝アル国史ノ成跡ト八柄トシテ日星
ノ如シ宴ニ冗(克)ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ
輸サ八国運發展ノ本近クスニ在リ朕
八方今ノ世局ニ処シ我カ忠良ナル臣
民ノ協翼ニ (倚)籍シテ維新ノ皇猷ヲ恢
弘シ祖宗ノ威(遺)徳ヲ対掲センコトヲ庶
幾フ兩臣民其レ冗(克)ク朕カ旨ヲ体セヨ

御 名 御 璽

明治四十一年十月十三日

己酉秋日為伊沢庄三君囑 高下才介拝写

大正十四年一月 鶴間改進養蚕組合發展記念之辞

蚕総合奨励委員

神奈(川)県蚕業調査委員

高下才介

識

(落款)

鶴間改進養蚕組合

發展記念之辞

(文章 10 行判読不能)

(連名 23 名判読不能)

干時大正十四年正月吉日

昭和十四年十一月 野島三趣翁頌徳額

頌 徳

野島三趣翁ハ教鐸ノ任

ニ杜ルコト実ニ三十有

六年ニ及ヒ本村文教ノ

進歩ニカヲ效サレタル

累積ノ功挙ケテ フヘ

カラス而モ精励 ニ毫

モ名利ヲ顧ミス常ニ実

踐躬行ノ範ヲ座レテ衆

ヲ弼導シ殆ト其半生ヲ

村童ノ撫 陶治ニ傾倒
 尽瘁セラレタリト謂フ
 ヘシ輒茲ニ薫染ヲ享ケ
 タル吾等門下ノ者相聚
 リテ三趣会ヲ興シ伊ヲ
 掲ケテ翁ノ高德ヲ顕彰
 銘記スル所以也
 昭和十四年十一月念五日
 三 趣 会

表1 諏訪神社奉納品一覧表

番号	題名	形態	年代	寸法(縦×横) cm	備考
1	奉納額	額	明治 11.12	102.5×223.5	
2	天照皇大神宮太々御神 楽奉納額	〃	明治 14.1	76×183.8	
3	北辰一刀流奉納額	〃	明治 19.10.15	182×273.5	
4	戊申詔書	〃	明治 41.10.13	42.1×59.5	
5	鶴間矯正会奉納額	〃	大正 4.4.14	76.5×139	
6	明治養蚕組合創立 15 周 年記念奉納額	〃	大正 11.9.15	79.4×156.1	
7	鶴間改進黨養蚕組合発展 記念之辞	〃	大正 14.正	68.5×144.2	
8	野島三趣翁頌徳額	〃	昭和 14.11.25	51.5×125	
9	七福神絵馬	絵 馬	明治 20	72.3×158.5	願主 当所 遠藤善左衛門
10		〃	明治 31.3.15	29.3×33.5	願主 山本氏
11		〃	明治 36.12	40×57.5	大和村下鶴間長谷川きん 38 才 長谷川彦八 21 才
12		〃	明治 37~38	38.8×57	日露戦争凱旋の時 柴田正太 郎・ナカ
13		〃	明治 45.6.22	36.8×47.4	和田安五郎
14		〃	大正 2	34.2×45.4	願主 土屋団二 25 才
15		〃	大正 11.1	30.5×40.5	橋本八才

16		"	不明	33.2×45.3	願主 当所 伊沢宇八・作造
17		"	"	35.5×51.2	願主 伊沢宇八・定吉
18		"	"	37.8×50	伊沢氏
19		"	"	50.6×75	小間物商店 浜野藤松
20		"	"	30×45.5	願主 浜田きそ
21		"	"	31.8×39.3	願主 瀬沼氏
22		"	"	34×45.5	大和村下鶴間 菊島氏
23		"	"	37×45	当村 菊島氏
24		"	"	33.8×45.5	
25		"	"	28.8×37.9	高橋貞子
26		"	"	54.8×81.5	関清太郎
27		"	"	30.5×36.5	当所 橋本フジ
28		"	"	23×31.5	橋本氏
29		"	"	39.2×62	
30		"	"	30×45.3	当所 小倉忠五郎
31		"	"	33.8×42	